Report on the Villages in Eastern China (3) : the Jiangsu Province and Shanghai Villages in March 2009

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/27729

華東農村訪問調査報告⑶

―― 2009年３月，江蘇省・上海市の農村 ――

弁　納　才　一

はじめに

華東地域の農村訪問は，今回(2009年３月)が３回目となる[1)]。今回は，これまでにも訪問してきた農村のうち，主に上海市嘉定区馬陸鎮石崗村と江蘇省太倉市沙溪鎮泰西村を訪問した。そして，前回までと同様に，上海市嘉定区馬陸鎮石崗村へは筆者１人だけで訪問したが，江蘇省太倉市沙溪鎮泰西村では奚衛明氏(泰西村副書記)と劉晴暄氏(上海師範大学社会学系)の協力によって聞き取り調査を順調に実施することができた。さらに，今回は初めて江蘇省常熟市の近郊農村を参観したが，かつて満鉄が調査した厳家上村の場所を確定・特定することはできなかった。

これまでの華東農村における訪問調査は，上海や南京における文献資料調査と並行して行ってきたために，依然として個人的な聞き取り調査あるいは参観にとどまっており，今後計画している中国側との共同研究のための予備的調査にとどまっている。

全体的に見ると，筆者の語学能力とりわけ上海語・呉語の聞き取り能力の低さに制限されて上海市嘉定区馬陸鎮石崗村における聞き取りは極めて不十分なものにならざるをえなかった。だが，嘉定・太倉への訪問は３回目ということもあってか，聞き取り対象者の警戒心もかなり解けて，聞き取り対象者との間に一定の信頼関係ができあがりつつあるようにも感じられた。

本稿では，前稿までとは違って写真の掲載は最初の訪問となった常熟市の農村を除いて極力最小限にとどめ，主に聞き取った内容を記録しておくこと

に努めて執筆した。

なお，華東農村の訪問調査は，華北農村の訪問調査と同時並行的に進めてきており[2)]，両地域の比較検討によって，中国農村社会の近代的変遷の特質を解明することを目指している。

Ⅰ　上海市嘉定区農村

⑴　馬陸鎮石崗村

訪　問　日　時：３月７日㈯午後
訪　　問　　地：石崗村澄塘橋
聞き取り対象者：龔文進
聞き取り場所：龔文進氏の自宅
聞　　き　　手：弁納才一

村の構成

・澄塘橋村はかつてあった橋（澄塘橋）を境として澄東村と澄西村に分かれていたという。

個人史

・小学校では共通語を勉強したことがなかった。当時の小学校教師も授業で共通語を話すことはなかった。そのため，今でも共通語を話すことができない（一応，本人は方言ではなく，共通語を話しているつもりだが，非常に聞き取りにくい）。
・竹籠作りの技術は，誰かに教わったわけではなく，20歳（1949年）頃から自力で身につけた。
・1958～61年の約２年間だけ，人民公社の澄塘橋食堂が澄塘橋村の中間地点にあった。この食堂で食事をするために，「菜票」と「飯票」を支給された。当時，食糧は「飯票」によって１ヶ月につき，男が36～38斤，女が32～34斤の米を配給された。食堂で料理を作る人は，村長が村民の中から選んだ。
・竹籠の材料の竹は，かつて勤務していた日系企業の上海協和木製品

有限公司[3]（本社は東京）から供給されているとして，1,300本の竹を手当てするという日本語で書かれたメモを見せてくれた。

後日，上海師範大学の学生を通訳にして再訪を計画したが，天候不良（寒波襲来）と筆者の体調不良によって断念した。ちなみに，上海師範大学の教員によると，学生に対するアルバイト代（謝金）は，半日で100元が相場だという。

⑵　馬陸鎮石崗村

訪　問　日　時：2009年３月９日(月) 10：30～11：30
11日(水) 15：55～16：15
訪　　問　　地：石崗村鄧橋
聞き取り対象者：丁濤泉，張秀芳（女），陳連珍（女），
劉宝娣（女），丁敏華
聞き取り場所：丁濤泉氏の自宅前［鄧橋934号］（**写真１**を参照）
聞　　き　　手：弁納才一

丁濤泉の個人史

写真１．丁濤泉（自宅前にて）



・1936年11月５日に生まれる（2009年３月現在，74歳）。
・解放前，自家は12畝の農地を所有する中農で，土地改革によって所有地はやや少なくなったが，詳しいことは覚えていない。
・1944年（８歳），小学校に入学し，1950年まで学んだ。ただし，1949年に経済的理由によって一時休学した。
・1951年（16歳），「初中」（中学校）に入学して３年間学んだ。ただし，1953年に経済的理由によって一時休学して自宅で独学した。
・1954年，西安市の幹部学校（「高中」すなわち高校に相当する）で学んだ。

・1955年，結婚（２歳年下の妻が20歳の時に結婚したと話していたことから考えると，結婚したのは1957年・22歳の時の間違いということになる）。
・1958年，３年制の南京地質学校（現在の南京工業大学）の地質学科（「専科」）で３年間学ぶ。
・1960年，新疆地鉱局第一区調大隊に勤務した（～1997年）。ただし，1984年に四川省成都市の省都地質学院で１年間学ぶ。
・1997年（60歳），定年退職。
・1998～2009年３月現在，新疆で高級工程師（エンジニア）として「返聘工作」をしている。そして，「2002年又返聘請工作」というから，当初は1998～2002年の４年間の契約だったのが，2002年に延長されたのであろう。ただし，毎年冬（１月～３月）には当該村に帰って来るという。３月末には仕事のために再び新疆に出かけ，帰ってくるのは来年2010年の１月になるという。
・以上，周囲の者が言うように，丁濤泉氏は当該村の中の知識分子であり，少年時代までを除けば，当該村にはほとんどいなかったことになる。ただし，2009年現在でも現役として働いているせいでもあろうか，記憶は比較的鮮明で，また，共通語を話すことができる。

張秀芳の個人史

・鄧橋村に生まれる。現在，72歳（おそらく数え年）だと言うが，生年月日は記憶していない。
・10歳，小学校に入学して２年間学ぶ。
・12歳，農作業を手伝い始めた。当時，両親は上海の工場に働きに出ていた。
・20歳，丁濤泉と結婚（自分の生年月日を記憶していないことや夫の口述と異なることから考えると，結婚した年齢が間違っているかもしれない。）。
・今回訪問した時，編み物をしていたが，記憶力はかなり衰弱しており，あまり積極的に話をしたがらない性格のようである。あるいは，よそ者に対する警戒心が解けていないのかもしれない。

陳連珍の個人史

・江蘇省に生まれる。現在，83歳で，６月10日生まれだと言うが，西暦何年に生まれたかは不明。83歳は数え年である可能性が高い。また，出生地も江蘇省のどこかは忘れてしまっている。

・24歳（1949年頃），本村に嫁す。

・農地は所有せず，夫婦で舟による運送業に従事していた。本村には水路･クリークがあり（現在は途中で寸断されている箇所が多くなっている），かつてはそれを利用して江蘇省や安徽省などまで出かけていったという。

・記憶力はかなり衰弱しているが，日本まで一緒に遊びに連れて行ってくれたら，いろいろと話をしてあげてもよいなどと冗談を言うなど，純朴な農民とは異なる風情を漂わせている。

劉宝娣の個人史

・現在，60歳で，すでに退職して仕事はしていないという。現在は，「麻雀専家」（専ら麻雀をして楽しく過ごしている）という。

・３月11日に訪問した時には麻雀をしていた。

丁敏華の個人史

・1952年12月14日に生まれる（現在，57歳）。

・1994～2004年，日本三栄電器公司（石崗村にある日系企業か？）で働いていた。

・2004年から2009年３月現在まで，鄧橋村丁北村民組長を務めている（制服のようなものを着用）。村民委員会はかつての生産大隊に相当し，その下に属する村民小組はかつての生産隊に相当するのであり，よって，村民組長とはかつての生産隊長に相当するという。

・共通語を話すことができ，共通語を話すことができない老人の話を通訳してくれた。積極的に説明をしてくれ，協力的な姿勢が見られた。今後の聞き取り調査でも協力を期待したい。

村の変遷と構成

・鄧橋村の大通り沿いには工場が林立しており，農家の家々は工業団地に埋もれるようにして残っている。澄塘橋村と同様に，周辺に農

地は全く見当たらず，大部分の家が「出租房」として外来の工場労働者に貸し出されている。ただし，丁濤泉氏宅と隣家（棟続きとなっている）は「出租房」とはなっておらず，この両家の前にある小さな敷地に近所の数人の老人が集まってきている。

・鄧橋村は以前は丁家村と呼ばれていた村であり[4]それゆえに丁濤泉氏や丁敏華氏のように丁姓が多く，丁濤泉氏宅の前を流れている水路を挟んで，丁北村と丁南村に分かれ，かつてはそれぞれが生産隊を組織していた。なお，今回，聞き取り調査を行った丁濤泉氏の家は丁北村（全63戸）に位置している。

・2008年７月１日から鄧橋・石崗・印村の３つの村が合併して石崗村となったという。

II　江蘇省太倉市農村

⑴　太倉市沙溪鎮

訪問日時：３月８日㈫午前

訪 問 地：泰西村・利泰社区

訪 問 者：弁納才一・劉晴暄

前回（2008年９月）と同様に，高速バスで上海から太倉まで行き，太倉で沙溪鎮行きのバスに乗て，途中，直塘でバイクのタクシー（後部に２人が乗車できる）に乗り換えて泰西村へ向かった。だが，今回も運転手（四川省の出身で，数年前にやってきたという）は泰西村の場所を知らなかったので，途中で何度も道を尋ねながら泰西村へ到着した。

泰西村に到着して，まず最初に書記の施雪濤氏宅を訪問した（その周辺には副書記の新宅も含めて新築家屋が林立していた）。ところが，書記は結婚式の宴会（「喫喜酒」）に出席しているために不在だったので，とりあえず父親の施金生氏（元書記）とひととおりのあいさつを交わした。そして，副書記の奚衛明氏と連絡を取ったが，副書記も多忙で（工場の経営･管理に関わっているようだが，詳細は不詳），午後１時からは時間がとれるということだったので，

午前中は村内を参観し，地図を手がかりにかつて利泰紗廠（利泰紡績工場）があったところを訪問して時間を費やすことにした。

書記の自宅は泰西村の東端に位置しており，そこからさらに沙溪鎮がある東の方へ向かって10分ほど歩いて行くと，橋があり，利泰（泰東）が隣接しており（この橋を境にして，西側が泰西，東側が泰東となっている），そこは現在は利泰社区となっていて，道路の両側には商店街が続き，農村の雰囲気は全くなくなっていた。

泰東にある利泰永豊紡織有限公司（かつての利泰紗廠）の守衛に工場内の参観を求めたが，許可されなかった（**写真２**を参照）。また，道路を挟んで，その工場の向い側に太倉利泰永豊紡織有限公司門市部（販売部）があった（**写真３**を参照）。

約束どおり，午後１時に副書記から連絡が入り，前回（2008年９月）と同様に，副書記は自家用車を運転してやって来たが，何らかの宴席に出席していたのか，明らかに飲酒をしており，顔面が赤くなっていた。この日は日曜日だったので，副書記も何らかの宴席に出席していたのだろうか。このように，祝日や日曜日には書記や副書記はいろいろな関係から様々な宴席に招待され，出席することが多いのだろうか。

移動中，副書記に村長のことを訊いてみると，村長という呼称の人間はおらず，それに当たるのが主任だという。山西省の村とは異なって，泰西村では，書記・副書記が村の実権を握っているようである。

なお，浙江師範大学の王景新教授が昨年に引き続き，今年も少し前に大学

写真２．利泰永豊紡織公司正門



写真３．利泰永豊紡織公司門市部



院生を連れて本村にやって来て博士論文作成のために数日間調査を行ったという。

⑵　太倉市沙溪鎮

訪　問　日　時：３月８日㈫13：00～15：00
訪　　問　　地：泰西村遙東
聞き取り対象者：奚仲良(1923年５月４日生まれ)
聞き取り場所：奚仲良氏の自宅
聞　　き　　手：弁納才一
案内役・通訳：奚衛明
通　　訳：劉晴暄

今回の聞き取り調査も，報告者が日本語で質問したのを劉晴暄氏が中国語(共通語)に翻訳し，それをさらに副書記の奚衛明氏が現地の方言(太倉方言で上海語に近い)に翻訳するという方法で行われた。また，前回(2008年９月)は主に解放以前の状況について話を聞いたので，今回は主に解放後の状況について聞いた。

抗日戦争中

・1938年，日本軍が村を占領した。
・日本軍は最初の３年間は食糧の挑発や税の徴収をせず，占領の３年後から食糧を徴収した。
・国民党が村民を兵士として徴用しようとしたが，代わりにお金を支払って免れた。この時が一番苦しい時期だった。

抗日戦争後・第二次国共内戦期(1945～49年)

・1945年，国民党軍が本村に戻ってきた。ただし，国民党も最初の１年間は食糧(税)の徴収をしなかったが，１年後の1946年から日本軍とほぼ同じくらいの食糧を徴収した。また，本村から約10㎞離れた項橋にいた新四軍にはこっそりと食糧を提供し続けていた(戦時中から継続していたのだろうか[5])。

・1945年，まだ見習いだったが，竹製品を作って売っていた。農業はやらなくなった。父母が農業に従事し，姉は利泰紡績工場で働いていた（11歳の時から）。弟は「鉄匠」をやっていた。
・1945～49年は，収入が年々漸増し，物価の高騰は激しかったが，米価も高騰したので，生活はそれほど苦しくはなかった。

解放時期

・1949年（26歳？）の解放の時も竹製品作りを続けていて農業には従事しなかった。

土地改革

・土地改革前は，10畝の土地を所有していたが，土地改革によって１人当たり2.4畝の土地を分配され，４人家族で9.6畝の土地を所有することになった。分配された農地はもともと所有していた農地とほぼ同じ場所だった。

互助組

・自家も含む奚家と王家（泰西村の中の遙東地区のみか？）の20戸足らずで互助組を組織した。

合作社

・初級合作社（後の生産隊規模）→合作社（後の生産大隊規模）→高級合作社（洞涇郷）を組織した。
・1953年，沙溪鎮に手工業合作社が成立すると，その社員となった（この時，同時に沙溪鎮の戸籍に移動し，毎月32斤の米を支給された）。当時，社員は自分と同業の「竹匠」が約50人，「木匠・泥匠」が約80人いた。勤務時間は７時から17時までだった。
・１畝当たり400斤の稲（稲100斤は72～75斤の米に相当する）を合作社に納入した。これによって家には余剰米がほとんど残らなかったので，妻の実家から米をもらっていた（返済を求められることはなかった）。本村から約30㎞ 離れている妻の実家は12畝の農地を所有し，そのうちの３畝は「良田」で，１畝当たり300斤の米を収穫することができたが，残りの９畝の良くない土地で納税分が計算されたので，ゆとりがあった。

大躍進政策

・土法製鉄運動には家族の者は誰も参加しなかった。村の若い人が何人か参加しただけで，農業生産にはほとんど影響はなかった。また，屑鉄を材料にしたので，各家庭から鍋などの鉄の供出はしなかった。このため，鉄の生産量は少なく，ノルマを達成できなかったが，それに対して特に処罰を受けたことなどはなかった。
・「修水利」(用水路の修築)を行ったが，大規模な水利建設運動は展開されなかった。従来は，牛を使って川の水を汲み上げていたが，人民公社が成立してからは電力による吸水も始まった。
・全国で大量の餓死者が出た1959～61年，当該村では特に食糧不足を感じなかった。

⑶　南京市南京農業大学

訪問日時：３月12日㈮ 14：00～15：30

訪 問 先：南京農業大学経済管理学院

(**写真４**を参照)

訪 問 者：弁納才一

写真４．南京農業大学北門



2008年９月に訪問してあいさつを交わしているので，今回の訪問は２回目となる。今回は，事前に連絡を取った上で南京農業大学経済管理学院院長の周応恒氏(京都大学に留学)を訪ねて，同経済管理学院農業経済系主任の胡浩氏(岐阜大学に留学)も交え，共同研究の可能性や中国農村聞き取り調査について主に日本語で意見交換を行った。

周応恒氏は，地域概念について，華中は長江中流域というイメージがあり，江蘇省は華東に位置しているという認識を持っているという。その意味で，筆者が華東農村と呼称しているのは理解しやすいという。

政府が大学に求めているのは，農村の現状調査とその政策提言であって，

純粋に学問的に歴史的な分析のみを行うのは困難であるという。ちなみに，周応恒氏は，前日に政府の要請にる安徽省農村の視察から帰ってきたばかりだという。また，中国人であれ，外国人であれ，中国の農村において多人数で大規模な調査を実施する（例えば，全村民に調査表を配布してアンケートをとる）のは極めて難しいが，少人数であれば，農村を訪問して数人の老人に話を聞くことは可能であるという。

今後，江蘇省農民銀行による調査報告がある江蘇省丹陽県の農村において聞き取り調査が実施できるか，可能性をさぐっていくこととなった。

⑷　常熟市

訪問日時：３月16日㈪ 11：30～14：00

訪 問 地：常熟市政府，西門大街

訪 問 者：弁納才一

満鉄は常熟県（現在は常熟市）でも農村調査を行っている。その農村の場所を現在の地図では確認することができないので，常熟市政府の中の政治協商委員会を訪ねて文史資料を購入し，ついでにその農村の位置などを尋ねようと考え，常熟市政府を目指した。10年以上前に無錫から長距離バス（高速道路は未整備だった）で約１時間をかけて常熟市政府を訪ねて政治協商委員会で文史資料を購入したことがあった。

今回は，上海南站から常熟長途車站まで高速道路を利用した高速バスで２時間10分を要した（運賃37元，保険料３元）。やはり，所要時間から考えると，無錫か蘇州から移動するのがよいだろう。

常熟長途車站の周辺一帯（服装城・招商城）の状況は，デパート，高層ビル，高層マンション（１㎡5,000元より販売という大きな看板広告を掲げているものもあった）などが林立するなど，かつてとは様子が一変しており，旧市街地へのバスの経路・運行なども全く異なっていた。そのため，市政府へはバスによる移動をあきらめ，バイクのタクシーを利用した。その運転手の話によると，経済開発区に新しい市政府ができたということだったが，バスターミナルで購入した2009年版の常熟市地図（５元）には旧市政府の場所に市政府と

書いてあったので，旧市政府に向かった。市政府前に到着してみると，市政府の門・守衛詰め所と看板はあったが，守衛は不在で，敷地内のほとんどの建物が壊されて行政機能が停止しているようだった。そこで，自力で満鉄が調査した村を訪ねることにした。

満鉄が常熟県で調査した厳家上村は，「県城西門外より小径を西に歩いて，約二・五粁の地点にある半農半漁村にして，本村に隣接して曹家彎村があり，クリークを隔てて南には東横浜・西横浜の諸村と対峙してゐる」[6]という記述を参考にして，厳家上村を訪ねることにした。ただし，近年の地図には，西門大街・曹家彎村・西横浜村を見つけることはできるが，厳家上村を見つけることはできなかった。

西門大街にある108番バスの終点のバス停（市一中）で下車すると，旧常熟県城の西門と思われる門（阜成門）が見える（**写真５**を参照）。ただし，最近，再建ないし修築されたのであろうか，その門の壁は真新しく，照明器具が設置されている（夜はライトアップされるのでろう）。その西門から虞山に向かって城壁が連なっており，虞山公園となっている（**写真６**を参照）。

さらに，その西門を通過してさらに西に向かって厳家上村があったと思われる方角へ向かって歩いていったが，結局，その場所を確認することはできなかった。現在の地図にある五愛小学校あたりであろうと思われる。近いうちに再調査したい。

なお，西門の西方の農村地帯にはまだ農地が多く残っているが，小綺麗な

写真５．旧県城の西門（阜成門）



写真６．虞山公園の入り口（西城楼閣）



農家が林立し，また，別荘のような高級マンションが建ち並び，農村の都市化が進展している。そして，常熟市街地には高層マンションが林立し，さらに，現在も陸続と建設中である。

おわりに

聞き取り対象者の記憶違いや聞き手の勘違いがしばしば生じることが今回の聞き取り調査でもいくつか明らかになった。このことから，聞き取り調査を複数人で繰り返し行うことの重要性と必要性を再認識した。

太倉市沙溪鎮泰西村の奚仲良氏は1949年以前のことについては記憶が比較的はっきりしているが，1949年以降のことについては記憶がやや曖昧な部分が多い。これは老人一般について言えることかもしれない。

上海市嘉定区石岡村の丁濤泉氏と太倉市沙溪鎮泰西村の奚仲良氏は，農業の集団化（合作化）には直接関わっていなかったので，その時期の事情を聞く対象者としては適切ではないと思われる。華東農村では，壮年期に村外で働いていたためにあまり農村にはおらず，かつての農村の事情には詳しくない者が多いように感じた。

注

1）過去２回の訪問については，拙稿「華東農村訪問調査報告⑴－2008年３月，江蘇省・上海市の農村」（『金沢大学経済論集』第29巻第１号，2008年12月）・同「華東農村訪問調査報告⑵－2008年９月，江蘇省・上海市の農村」（『金沢大学経済論集』第29巻第２号，2009年３月）を参照されたい。

2）華北農村訪問調査については，拙稿「華北訪問調査報告⑴－2007年12月，山西省太原市・霍州市農村」（『金沢大学経済論集』第29巻第１号，2008年12月）を参照されたい。

3）前掲拙稿「華東農村訪問調査報告⑴」299頁を参照されたい。

4）同上，297頁。

5）前掲拙稿「華東農村訪問調査報告⑵」を参照されたい。

6）満鉄上海事務所調査室編『江蘇省常熟県農村実態調査報告書』上海満鉄調査資料第34編（満鉄調査部，1939年）67頁。